

本棚の隅の「愛蔵書」

The complete works of Raymond Carver

レイモンド・カーヴァー著 村上春樹訳

中林 雅士[§]

カーヴァーを手にするのは、いつでも夕暮れ時だ。晴天の名残りを焼き尽くすような苛烈な時間ではなく、花曇の空の終わりに現れる、どんよりとした薄オレンジ色に染まる雲の隙間。できれば、外がよく見える大きな窓際に気に入った椅子を置いて、体の半分程に微かな日差しを感じられるならなおいい。全集だといっても、ちょうど手ごろな大きさで、表紙を開くのに億劫になることはない。ぼんやりと今日の出来事を思い出し、目次に並ぶタイトルからひとつの作品を選ぶ。どれも短編ばかりだから、読み終えるのに10分とはかからない。夕暮れの雲が群青色に変わってしまうそのわずかな時間だけを、カーヴァーとともに過ごす。

レイモンド・カーヴァーは、20世紀を代表するアメリカの短編小説家であり、詩人でもある。彼の全集は1991年から2002年までの約10年を経て全7集が刊行された。彼の創作者としてのキャリアは決して長くはない。1983年にはピューリッツァ賞にノミネートされるが、その5年後、50歳で他界している。彼の作品は、時にミニマリズムと評されるが、贅肉を極限まで切り詰め、的確な情景描写から生み出される物語は、端的に一言で評価できないだろう。

これまでに一度も日記をつけたことがない。これからも、一生日記をつけることはないだろう。普通の生活の中に潜んでいる、“それ”を綴るためには、いつだって目を開けていなければならないし、平凡な自分が耐えることなどできるはずもない。だから、カーヴァーを読む。

決して望んでいるわけではないのに、“それ”はおそらく、ひょっこりと姿を見せるのだろう。まるで古い友人が突然の便りを寄こすように。カーヴァーは、そっと耳打ちするように、その時が訪れるのを教えてくれているのかもしれない。

[§] なかばやし・まさし / 図書館事務部図書館庶務課システム担当